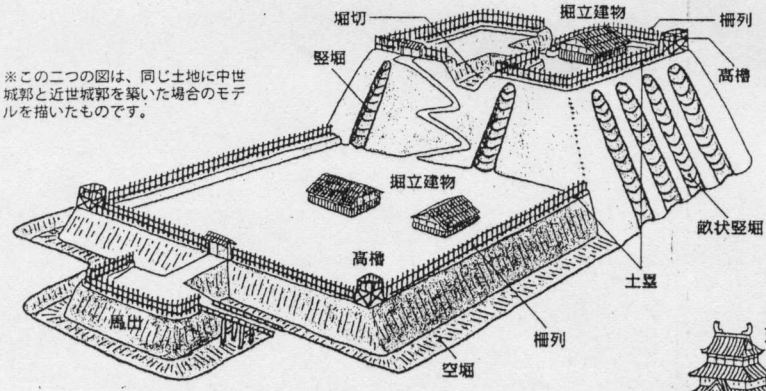
縄張

さまざまな事情（地形、交通、河川や港湾の有無など）で選ばれた土地に、敵を防ぎやすいよう、味方が守りやすいように城の設計をするのが縄張である。

中世城郭の縄張

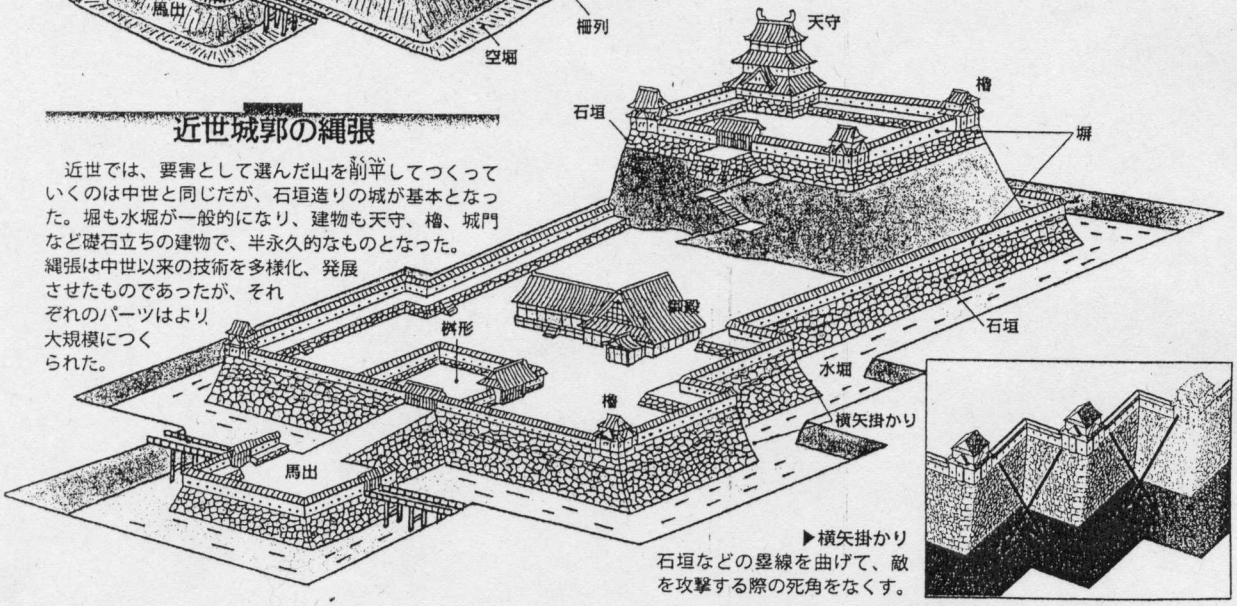
中世では、要害として選んだ山に曲輪をつくり、堀切や竪堀、土塁などで防御を固める。麓には空堀を巡らした例も多く、そこには掘立建物があった。見た目は粗末だが、防御力は強力なものも多かった。また拠点城郭ばかりでなく要所ごとに築かれたので、地域によってはかなりの数の、大小の城があった。

※この二つの図は、同じ土地に中世城郭と近世城郭を築いた場合のモデルを描いたものです。



近世城郭の縄張

近世では、要害として選んだ山を削平してつくっていくのは中世と同じだが、石垣造りの城が基本となった。堀も水堀が一般的になり、建物も天守、櫓、城門など礎石立ちの建物で、半永久的なものとなった。縄張は中世以来の技術を多様化、発展させたものであったが、それぞれのパーツはより大規模につくられた。



▶横矢掛かり
石垣などの塁線を曲げて、敵を攻撃する際の死角をなくす。

小学館『日本の名城百選』より抜粋

石の積み方

石垣

土塁の表面に石を積んで防御力を強化したもの。16世紀中頃から現れ、積み方には大きく３つの種類があります。

①野面積み

自然の状態の石をそのまま積みます。水はけが良いが、石と石の間にすきまができるので、そこには小石などを詰めこみます。表面がごつごつしているので、登られやすいのが欠点です。

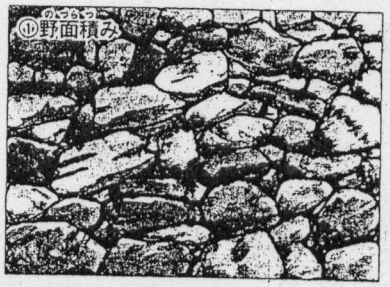
②打込みハギ

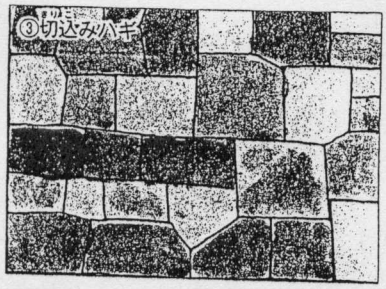
自然石をある程度加工して積みます。それ以前より高く、急な勾配をつくれるようになりました。関ヶ原の戦い以降、打込みハギが多くなりました。

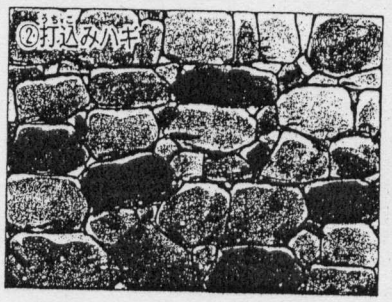
③切込みハギ

石を四角形など整った形に加工して積みます。石どうしが密着していて見た目がきれいですが、石が密着しているので雨に弱く、排水設備が必要になってきます。

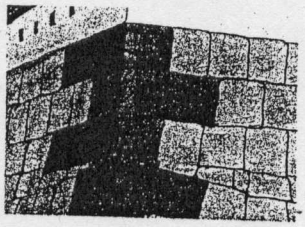
岩崎書店『日本の遺跡と遺産』より抜粋



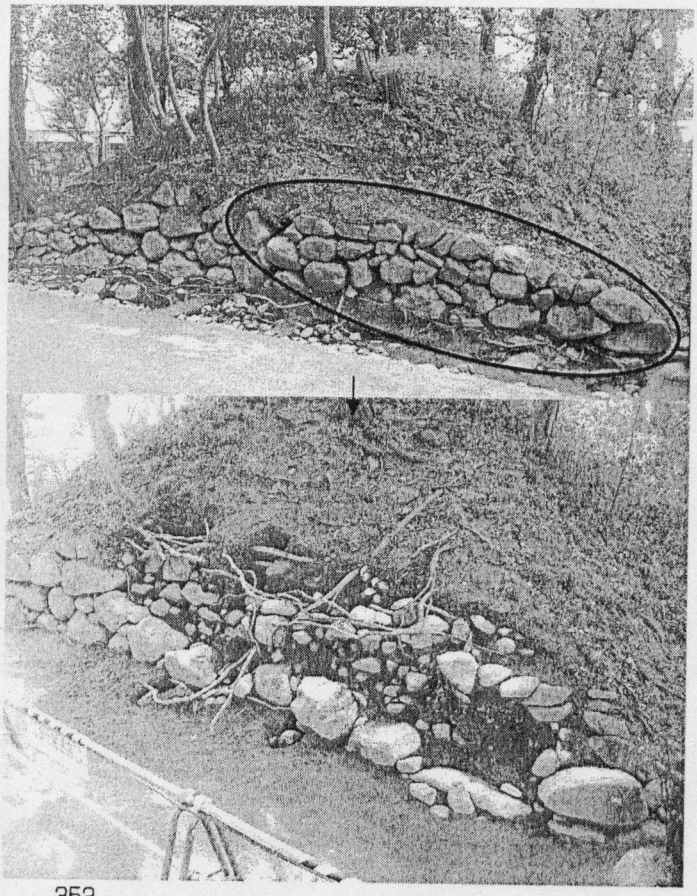


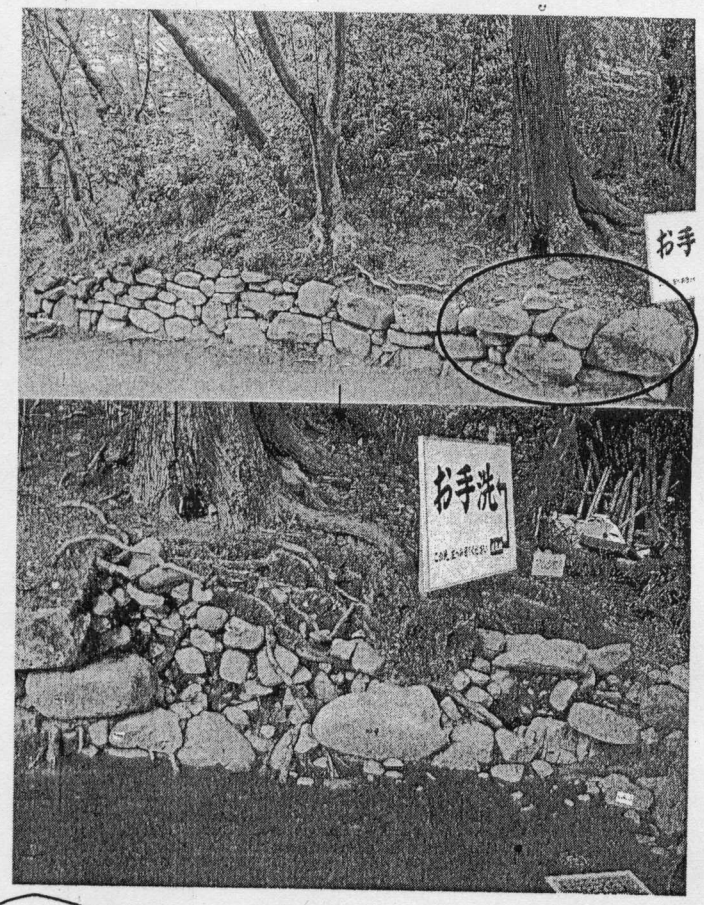


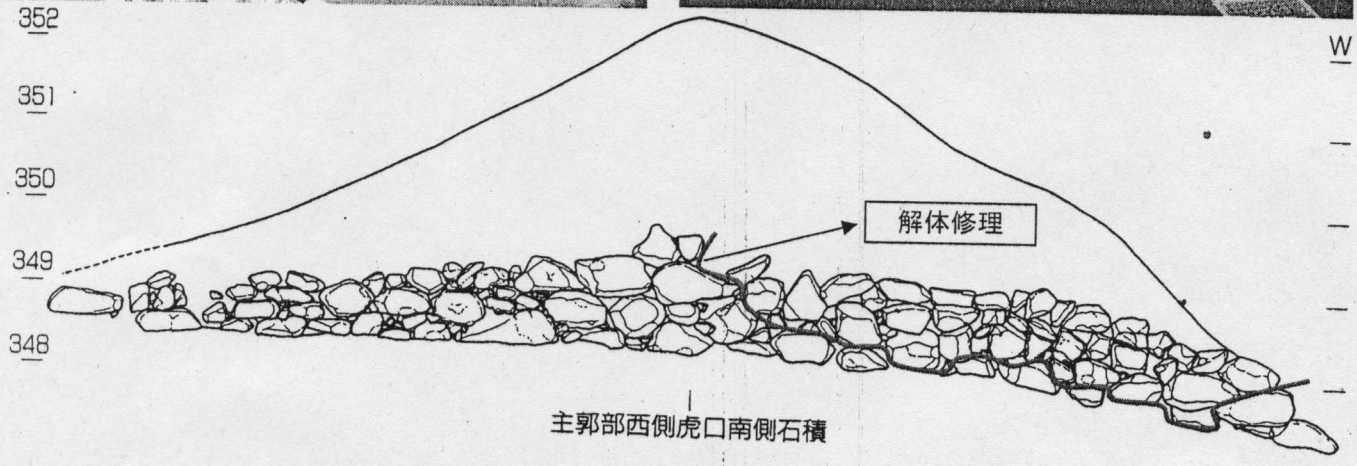
算木積み



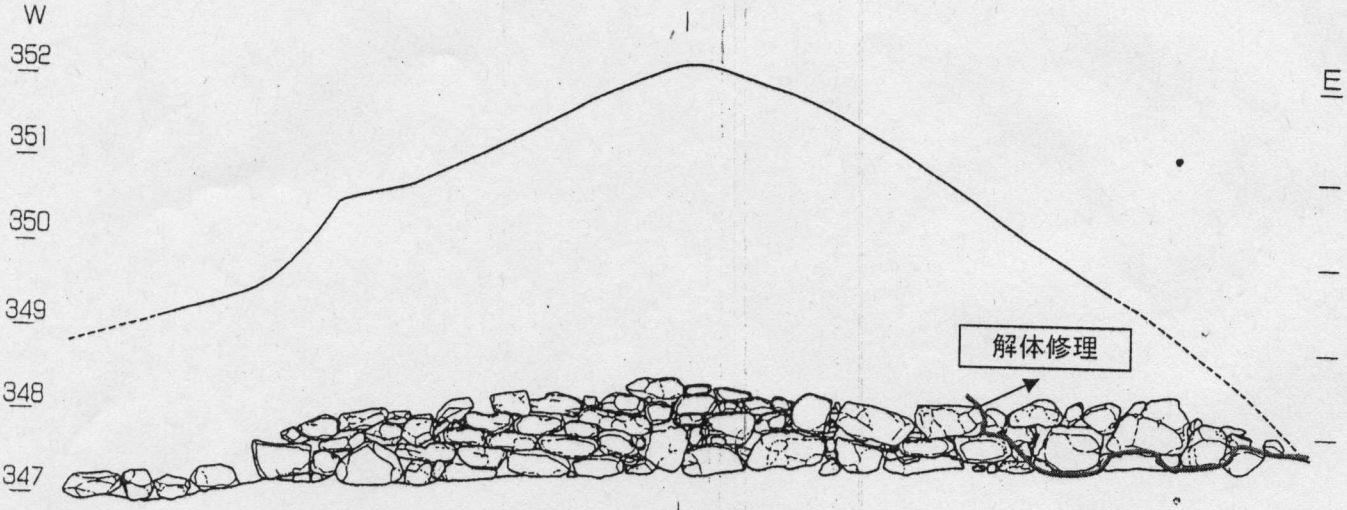
城の隅（角）は、櫓や天守が建っているため、崩れやすく、ていねいにつくらなければなりません。ふつう城の隅は、算木積みで石を積んでいきます。算木積みとは、石材の長辺と短辺を交互に組み合わせ、隅をがんじょうにする積み方です。17世紀の初め頃、算木積みは完成しました。城の隅を見れば、城がつくられた年代がある程度わかります。







主郭部西側虎口南側石積



主郭部西側虎口北側石積

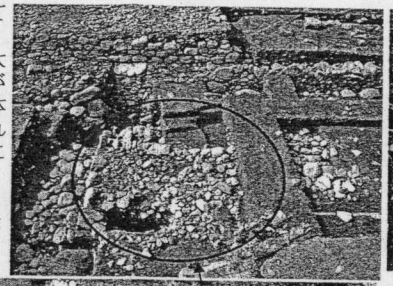
史跡武田氏館跡石積み・石垣

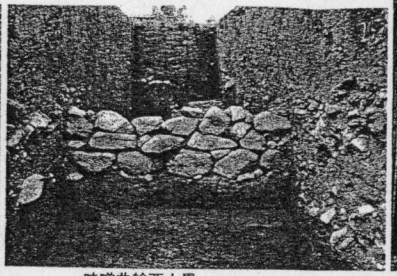
史跡武田氏館跡の石積み・石垣

史跡整備に伴い平成７年度から着手している史跡武田氏館跡の発掘調査の中で、現在露出している遺構も含めて多数の石積み・石垣が確認されている。大手石塁に関しては、全体の発掘調査を実施し、出土遺物からも16世紀後半から末期の年代が与えられる。現在は部分的に解体修理を行い、史跡整備を完了している。現状で目にすることのできる石垣の多くは大手石塁と石積みの構造や技術が類似しており、武田氏館を取り巻く歴史や甲府城跡などと比較すると、甲府城跡より一段階古い天正～文禄年間の遺構が主体ではないかと思われる。

惣堀土塁隅で石組が検出されている。南・西方向に石列があり、内側には礫が検出されている。大手石塁周辺の構造からこの場所が虎口と考えられ、石列は石塁本体と対になる石垣根石と考えられる。構造的には西曲輪枡形虎口に類似した形態と想定される。

古絵図には土塁表記であるが、部分的に石垣が用いられていると考えられる。

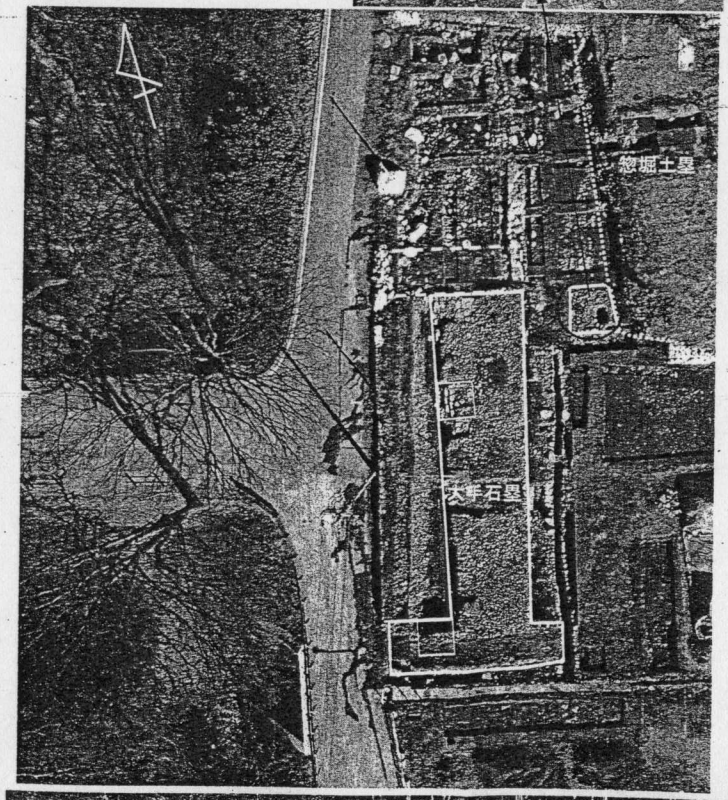




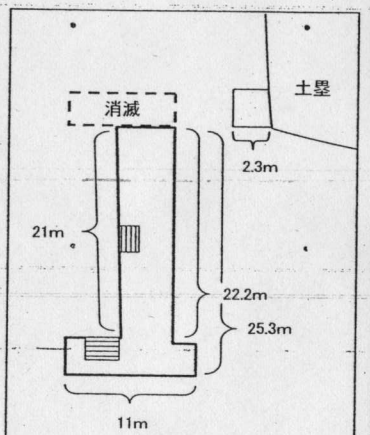
味噌曲輪西土塁

天守南面

主郭北土橋



大手石塁概念図

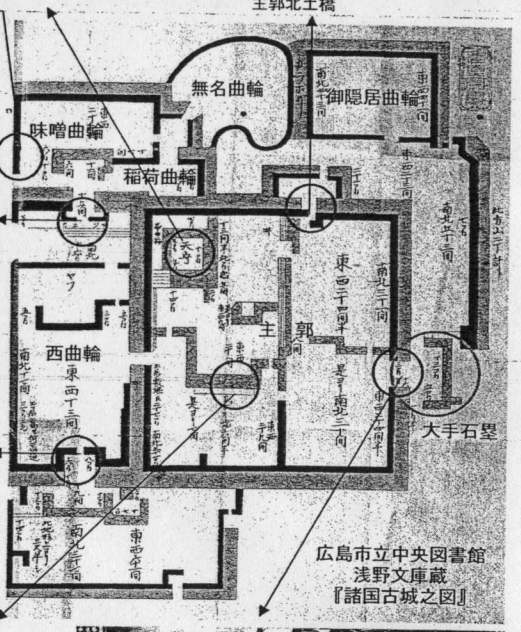


	現存段数	現存幅	現存高
中央階段	３段	1.8m	0.6m
南側階段	４段	1.8m	0.6m
東面北	2～3段	西へ5.8m	0.6m
東面南	6～7段	西へ5.3m	1.4m

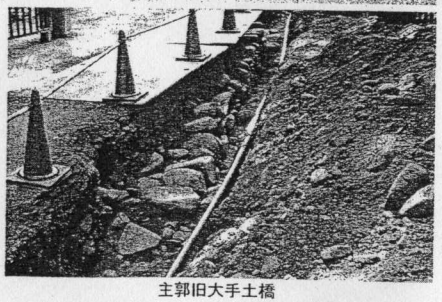
石積み勾配　２～３分勾配
石　材　安山岩無加工
内　部　中央階段踊場を除き栗石

西曲輪北側枡形虎口

西曲輪南側枡形虎口



主郭中曲輪石塁



主郭旧大手土橋

大手石塁東面